



ジャン・フランソア・ミレー  
Jean Francois Millet.

本篇は「ヘンター・オング・アンゼラス」より抄録したるものにかゝり、拙文能く大畫伯の全豹を盡すを得ずと雖も、亦以て其風手の一端を窺ふに足らんか。  
(潮生譯)

第一章 アンゼラスの畫家(上)

ジャン・フランソア・ミレーの傑作を以て稱せらるる畫中に、種を播ける農夫を描けるものあり。其農夫たる激しき労働の爲めに、見るから淺ましき迄に荒らぐれし風手を呈し、身には破れし跡を幾度か補綴しけん、夫れさへひた裂けに裂けて、見る影もなく痛く垢染みし粗服を着けたるが、今しも鋤き返したる島の黒き土を踏みて、其硬く醜き手より種を播ける、其動作は宛も彼の非情の機械が規則正しく運轉せるにも似て、希望なくはた失望なき運命に化じ了られし若々しき顔には、兩眼無邪氣に輝きて、播くべき島の如何許り残れるかを測り居れり。後景なる丘の上には牛に犁を挽かせて島を鋤ける男の、牛の軛を回らして、畦の方向を轉せんとし、一群の鳥は種を播ける農夫の後ろに近く従ひて、播きたる種を掠めんとしては、喧しく相争ふの状を示せり。時に日は早や西に没して、微に弱き最後の光を地上に投げれば、東天漸く暗の帳を下して、夕暮の冷かなる夜氣は、労働と貧乏の唯一の報ひたる休息の時を與へんとて静かに野面を覆ひ去らんとせり。

るを得れども、人間たる労働者の晩年は、終に其の老境の苦痛によりて骨を刻み肉を削られつゝ、徐々として自ら殺さざる可からざるにあらざるや。嗚呼種を播くの時、之が收穫を擧ぐるの時、是れ實に人をして此の如き土地の奴隷に均しからしむるものなり。彼は生存せんが爲めに生き、生きんが爲に労働し、労働せざる可からざるが爲めに労働するものなり、朝々暮々彼は只だ過ぎし昨日の繰回しの外に何等の明日に望む所なきなり。東天漸く白からんとては、非情の獸類と共に起き、晴天と雨天とを擇ばず、只だ、獸類と共に其努力を分ち、無智と貧窮との苦しき縲縛を復び新にせんとして、獸類と共に猶ほ獸類の如く眠るのみなり。

ジャン・フランソア・ミレーの自畫肖像



『アンゼラス』を畫きし畫家は、自ら農夫の一人にして、然も世々農を以て業としたる純然たる農家の産なり。故に己が同族たる農夫に對しては、常に最も深き同情を有したりと共、其技術の生涯たる、亦他人の收穫の爲めに種を播く農夫に髣髴たる所ありき。彼が生涯は實に他の開路者の運命に同じく、其爲すべき業は地を裂き路を拓きて、己が現在に與へられざるものを將來に供せんとす、實に悲惨の運命なりとす。彼の技術は當代のあらゆる習弊を打破するものなりき。虚偽の福音によりて邪道に誘はれ害はれたる世人の趣味は、不撓の教育と進歩的教化の手を假るに非ざれば、容易に彼が唱道せし眞の福音の標準に昇り得ざりしなり。而して斯く一般世人が教育され教化せられつゝある間に於て、此畫家は只管貧乏と孤立と戦ひつゝ、痛く疲れたる心身を以て、唯だ不撓の精神により其途を進み、激しき惱みの裡に絶えざる苦痛の重荷を負ひつゝ、其身を愈々其筆により永く不朽のものたらしめたる農夫の生活と親しからしめたりき。

足には農夫の木履を穿たしめ、頭には農夫の帽を冠らしめよ。斯の如き人物こそ、此傑作をもつて畫家の肖像にして、世界最大美術の一大流派を創設し、飢餓と缺乏とに屈せず、現在を賭して未來に打勝ち、虚偽凡俗の過去の興へんとする誘惑を卑下せし大家傑は實に斯の如き人物なりき。吾人は茲にアルベール、ウオルフ氏と共に、健軀憂鬱の此人が野に終日を費し、晩歸の路に就きたる其跡を追ふて、彼が貧しき小屋を訪はん。時は是れ秋の夕暮にして、野は既に間近き冬の木枯しの爲めに蕭殺たる時なり。

『卑しき衣を着たる幼兒等は、寒氣の爲めに慄へつゝ學校より歸り來れり。孩兒は心配氣に食卓の上を眺め、何故に布を敷かぬかを問へば、母は優しき眼を以て彼等を見やりつゝ、今しも野

後悔記 (其三)

司馬江漢 自記

父は不意に其顔を擡げしが、外方の大地に木の脚の響くを聞きぬ。聽て扉は開かれて「光明よ」と大なる強き聲は呼びぬ。此夜は飢えたる腹を抱きて床に臥すを要せざるを知りき。是れ巴里より歸りしデイヤズにして、今其友なるミレーの畫三點を、一點五弗宛に賣り、茲に十五弗を携へて入り來りしなり。デイヤズとは誰ぞ、亦た決して裕かなるものにあらずと雖も、彼よりも猶ほ殊に甚しく窮乏せるミレー一家に對しては、一二貨を與へず看過するに忍びざりき。

予壯年の時老母一人あり、親をば十四歳の時失ふ、かつて妻子なし、母の性質剛直にして貞實也、孟子の母の如し、故に二十有餘にして妻を娶らず、ある時考へ思ふに、生涯妻子を求めずして、母没しぬる後に至りては日本諸國を遊歴して、而後には京攝の間に住居して、昔此地に且舟(淡々)と云ふ俳諧師八十餘まで存在して妻子なく、十一二三歳なる童女を多く傍らに置き、左右の物を取らむ、彼が自筆を得る者鮮し、皆童女をして代筆なせしむと、予此且舟(淡々)が人となり慕ひしに、母七十二にして老耄して没しぬ、さらば家を捨てて、獨歩して諸國名山を遊覽せんぞ決しけるに、親族の者頻に留め、聖人の教を以て示し、人道は妻子を以て子孫とし、之に差ふ時は人道にあらずと、爰において竟に留まる、是れも量見違なり。

さて又予なき者は物のあはれを知らず、我子を愛するのあまり其愛他の子に及べり、此情は書にも文にも述ぶる事能はず、然るに段々生長して後、己の身體親の躬より出たりと云ふ事を辨する者鮮し、且又孝をつとむる者多からず、親を親とせざる者多し、親は子を子とし、子を思ふの情深し、是れ己の體より出でたる故なり、今に至りて考ふるに予は無きにかじ。

今西洋の天學、萬造の窮理を以て考ふるに、天地の中一つとして靜まる者更になし、日輪五星、地球、月皆動き旋り一刻も留まらず、元より生類人間走り動き惑ひ迷ふ事天と一物の機なり、目に物の移り、耳に音のひびき、神經以て之を知り、物慾、色慾、飲食慾貴も賤も此慾の爲めに靜まること能はず、然るに此三慾に迷ひ惑ふは活きたる者の性質なり、我名利と云ふ大慾に奔走し、名を求め利を求め、此二の者に迷ふ事數十年、今考ふるに名ある者は、躬に少しの謬ある時は其あやまちを世人忽に知る者多し、名のなき者誤ると雖も知る者なし、是名を得たるの後悔、今にして初めて知り、愚なる事にあらざるや、夫れ天地は限りなし、名千載に残ると雖も、十萬歳に至るべからず、爰を以て考ふるに名は生きて居るうちの名にして是れ皆心得違なり。(完)